

本論文は、日本語文処理の時間的側面に関して、主として実験者ペース読文法を用いて検討したものであり、全4章から構成されている。

第1章では、これまでの文処理の時間的な側面に関する言語心理学的な研究の流れを概観し、その心理学的な意義を論じると共に、これまで主として用いられてきた自己ペース読文法の問題点を指摘し、より有効な手法として、視覚認知の心理学的実験で頻繁に用いられている高速逐次提示法を援用した新しいタイプの実験者ペース読文法を提案している。第2章では、実験者ペース読文法を用い、通常の文と、文処理の途中で統語的な再解析が要求されるガーデンパス文の処理の時間的な側面を、文節あたり500ミリ秒以下の速い提示速度に焦点を当てて分析した。その結果、これまで否定的に見られてきた、日本語ガーデンパス文の処理負荷の増大を明示的に示すことに成功した。一方、同一の文刺激について従来の質問紙法や自己ペース読文法を用いた場合には、通常文に比べてガーデンパス文の処理負荷が増大することを検出できなかった。実験者ペース読文法を用いることによって、データに閾値を当てはめ、処理速度の指標や提示時間の延長による正答率向上の漸近レベルを推定することが可能になったことは、今回用いた実験者ペース読文法の有効性を示すものである。第3章では、より遅い提示速度を含む文処理の検討を行った結果、ガーデンパス文では文節あたり3秒という低速の提示でも正答率が90%に達しなかったことから、文処理の進行と共に、内部に保持された情報が減衰する過程を考える必要が生じた。こうした結果を受け、実験参加者のうち熟達者と非熟達者の結果を詳しく比較し、文理解の成績は、処理の進行に関わる過程と内部の減衰に関わる過程の両特性を反映しているというモデルを提案した。さらに、その減衰がどういう内容の減衰を反映しているのかを検討するために、3つの実験を実施し、ここで想定されている減衰が文節の記憶のような単純な記憶ではなく、文の統語処理に関わる情報の減衰であろうと結論した。第4章では、以上の結果を受け、本論文で提案している実験者ペース読文法の手法が言語処理の時間的な側面を解析する手法として有効であることを述べ、また今回の結果から明らかになった文処理の時間的な側面に関する知見に関して論じると共に、文タイプの違いによる時間的側面の差異をさらに詳しく検討するための今後の研究方針を提案している。

本論文は実験者ペース読文法というこれまであまり用いられていなかった手法を視覚認知の心理学的実験で用いられていた解析法と組み合わせることによって、文処理の時間的側面の研究に新しい可能性を示したものと言える。また、日本語においてもガーデンパス文の処理が増大することを明示的に示した点も評価できる。さらに、文処理の時間的側面を、進行と減衰の二つの側面に分けて記述する新しいモデルを提案している。モデルの詳細については未だ検討不足な点もあるが、この点は今後の研究に期待したい。全体として、本研究の言語心理学一般への貢献は多大なものであり、本審査委員会は、本論文が博士（心理学）の学位を授与するのにふさわしいものであるとの結論に達した。